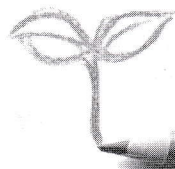


超芸術トマソンが養う 環境への目線と気づき



佐藤 建吉 SATO Kenkichi

一般社団法人 洗楓座 代表理事

旧建築物の一部と新建築物が共存する都市や街の中に、その両者が「妙味ある違和感」が見出されたとき、それを芸術とみなし「超芸術」とリスペクトし「トマソン」と呼ぶ活動がなされている。トマソンは、新旧の共存、とくに旧の中に「無用の用」の価値を見出す。私たち人間が「主体者」として暮らし日々多様化する「環境」、それが織りなす「状況」。超芸術トマソンの発見という活動は考現学の一つであり、私たちが暮らす「環境」を、持続可能な「状況」とするため、「主体者」に観察者と批判者としての目を養う。それは、新たな環境倫理の基(もと)を教えてくれるだろう。

はじめに

本稿は超芸術と呼ばれる活動であるトマソンを取り上げているが、連載名の「環境倫理」の解説である。環境倫理は私たちが主体者として暮らす環境の持続可能性が今日の目標である。それは主体者のいい居場所の存続のためにある。ゆえに、主体者と環境は相補的に共存しなければならない。主体者はこのことを必須の要件として認識しなければならないだろう。

今回のテーマは、冒頭に述べたように、一般にはなじみがない、あるいは気付かれていない「トマソン」について取り上げる。それは街の中にある建築物の改修や建て直しによって旧建築物の一部と新建築物が共存し、その両者に「妙味ある違和感」が見出されたとき、それを芸術とみなし、さらにリスペクトし「超芸術」と呼ぶ活動が「トマソン」であるといえる。

改修や建て直しによってその場に存在することになった「妙味ある違和感」は、似つかわしくない環境としての存在から生じるといえる。それは私たち「主体者」が暮らす新たな「環境」の一部となる。

現在の環境に残されている旧建築物の一部は、価値がないとされることがある。それはふつうは無視されてしまう。または気付かれさえしない。しかし、少し時間を過去に戻して考えると、その存在は、従来は周囲と適

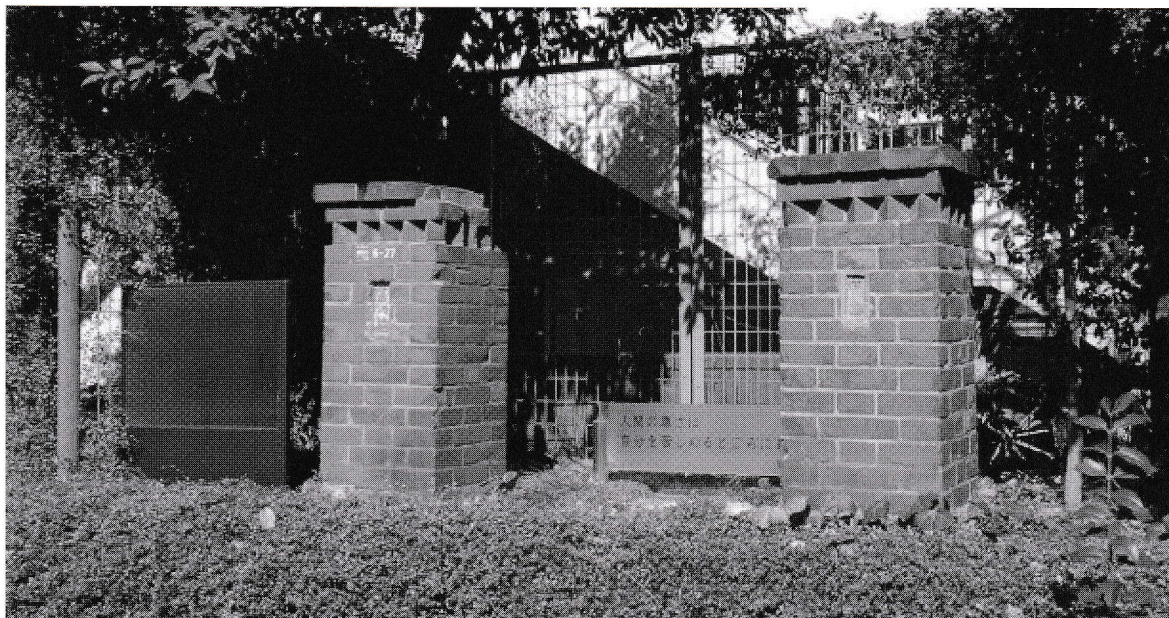
合し、居場所を獲得していたのであった。あるいは、エコロジーの場でもあったともいえる。

以上のような「妙味ある違和感」は絶えず改変や改修が繰り返される都市の中に現れ見出される。その後、消えたりする存在でもある。建築物や建造物では、旧いものに新しいものが、新しいものに旧いものが存在している。両者の存在は、一方は主体的、もう一方は浮いた存在でもある。これらは「環境」についての主客の対比でもある。すなわち、トマソンから環境倫理について考えることができる。大切なことは、私たちが暮らす環境の中に「妙味ある違和感」を見出すこと、すなわちそれを発見することである。

この「トマソン」の人間社会への当てはめも検討できる。「自分」と「他者」としての関わりである。新旧を自他での見方を変えたものである。これは、トマソンの発見により、多様化する現代社会へ位相の高いエフェクトを与える。

本稿では、トマソンの発見という活動の中に、環境を守るという視点、すなわち、環境とエコロジーへの意識を向けることへの気付きなどについて解説したい。加えて、トマソンは芸術の中に「超芸術」を見出したが、環境の中に「超環境」を見出すことができるだろうか？ この疑問への答えについても触れたい。

図1／無用の門としてのトマソン



(超芸術トマソングループから引用)

1. トマソンの発見

トマソンは、既存建築物が改修や改築されたときに、既にある旧建築物と新規建築物が同時に存在することにより見出される。例えば、図1のような新旧のシーンがそれである。この例は無用門といわれるとおり、かつては立派な正門であったが、利用目的が変わり、門にはフェンスが建てられ、歴史の代弁者になっている。

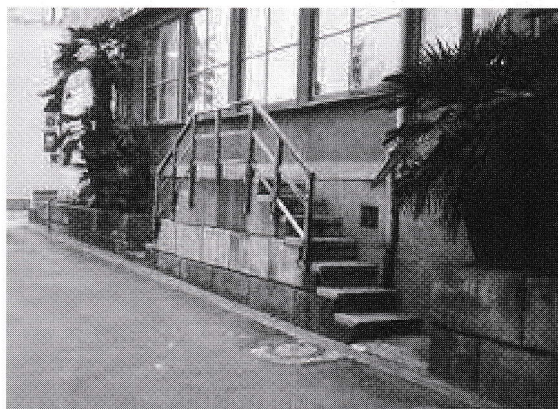
この事例のように、新たな建築物は必要性が高く、目的があってつくられたので客観的にも主観的にも存在価値がある。しかし、旧建築物の存在は名残りを留めているにしかすぎず、現存の価値は低い。結果として、極論すると、新旧建築物はミスマッチの感覚がある。それを「妙味ある違和感」ととらえ、ある面において芸術となっているとし、さらにリスペクトし、これを「超芸術」とする。

この概念は当初、赤瀬川原平らが図2の階段に関して見出したが、そこで超芸術は、以下のように説明されている。

「超芸術」＝「芸術のように実社会にまるで役に立たないのに芸術のように大事に保存されあたかも美しく展示・呈示されているかのようなたたずまいを持っている、それでありながら作品と思って造った者すらない点で芸術よりも芸術らしい存在」

別の言い方では、「まるで展示するかのように美しく保存されている無用の長物、しかも存在がまるで芸術のようでありながら、役に立たない、非実用において、芸術よりももっと芸術らしいものを「超芸術」と呼び、その中でも不動産に属するものが、トマソンと呼ばれる。

図2／トマソンの端緒、赤瀬川原平の階段



(『超芸術トマソン』から引用)

超芸術トマソンの中には、かつては役に立っていたものもあるし、そもそもつくった意図がわからないものもある。超芸術をつくる者(作家)はいない。その発見には考現学を必要とし、その発見により、次には鑑賞することができる。トマソンは無価値への価値、すなわち無用の用を見出すことである。ただし、トマソンには作者はいないが、観察者がいることで発見され、鑑賞される。

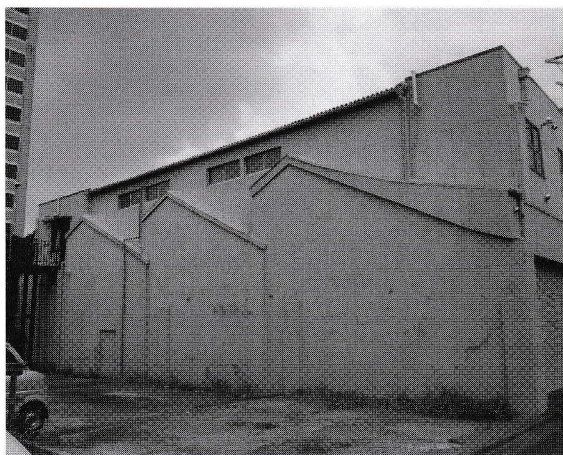
2. トマソンの分類

2.1 建物

上述したように、トマソンは建築物として認識がスタートし、さらに「妙味ある違和感」の対象が広がった。図3は超芸術トマソンの好例である。光取りの屋根をもった工場などが存在した歴史的証拠を見事に残している。

図4と図5も取り壊された隣接した建物の大きさと形

図3／光取りの屋根を残したトマソン



(超芸術トマソングループから引用)

図4／取り壊された隣棟の屋根跡のトマソン



(超芸術トマソングループから引用)

図5／図4と類似のトマソン



(超芸術トマソングループから引用)

状を教えてくれる。

2.2 街路

街路にもトマソンは多い。それは建築物として改築され、改修面が露出し人目につく。したがって、トマソンとして発見されやすいからである。

図6は壁に描かれた二つの円形に見られる。その目的や所縁は不詳であるが、二次的につくられた見事な「芸術」らしさがある。

図7は年月が看板の文字を消失させ、アラビア文字のようなアートとした。図8は、屋根からぶら下がっていたツタが風に揺られ、倉庫の壁に円弧上の痕を残した。

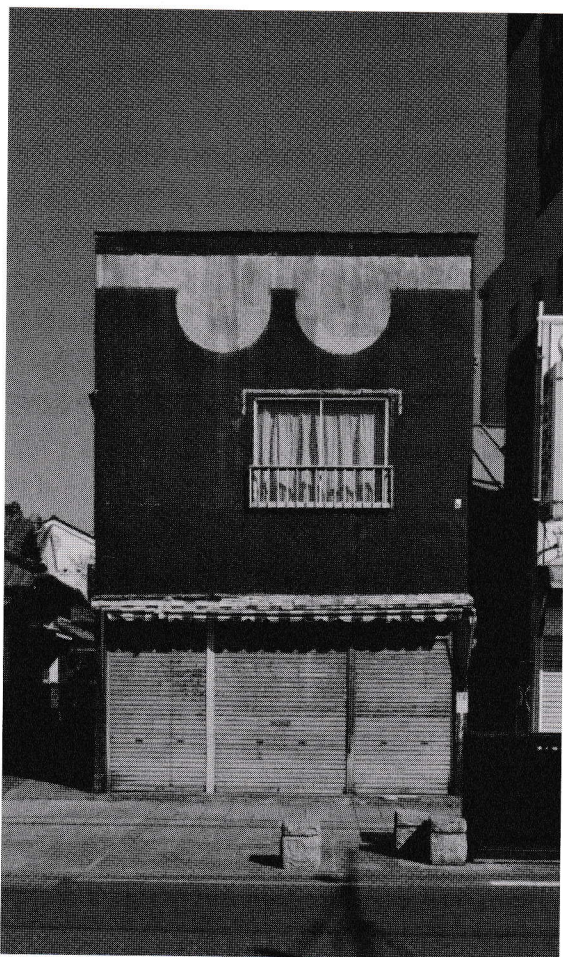
2.3 その他のトマソン

建築物や不動産における無用の長物がトマソンとされる。芸術としての発見が必須で、その形成は一時的であるが面白い構図である。図9で不思議なことは、太陽の来る方向に、街路樹の影ができていていることである。これは、太陽光線が、まず全面がガラスの壁面を持つビルで反射して、その反射光が樹木の影をつくった。都市ならではのトマソンといえる。

2.4 似非トマソン

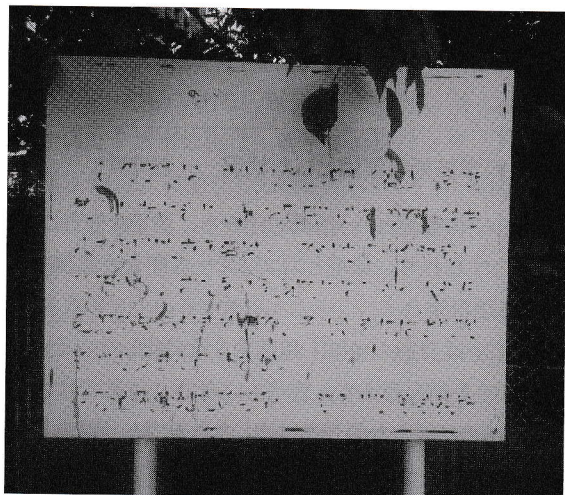
暮らしの中で、事物や事例に芸術としての「妙味ある違和感」を発見することは、さらに面白いと筆者は考えている。図10は電車の中で形成されたコースティック像である。これは座席を支える垂直のステンレスパイプに窓の外から差した太陽光線が当たり、その反射光が床に描いたコースティック像で、写真の中央にある黒い

図6／トマソンらしい外観



(超芸術トマソングループから引用)

図7／年月がつくり出したトマソン



(超芸術トマソングループから引用)

図8／風で揺れたツタがつくったトマソン



(筆者撮影)

影と白い円形の輝線がそれである。

これは作者のいない(アノニマスな)芸術ではある。おそらく従来からの定義では、トマソンではない。しかし、この像の存在を見出す考現学は、私たちの暮らしの中で面白く、大事であると思われる。ゆえに似非トマソンではあるが、リスペクトし、トマソンとして例示したい。

3. トマソンの特徴——アノニマスの芸術

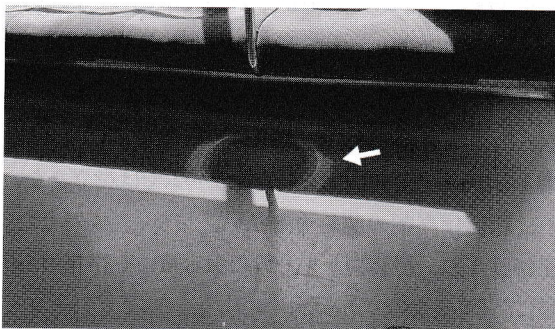
トマソンは、新旧の建築物のかかわりでみられる芸術、すなわち「超芸術」である。新旧のそれぞれの建築物

図9／ビルの窓ガラスで反射した光が描いた街路樹とその影



(筆者撮影)

図10／電車の床に形成した円形の反射光の像



(筆者撮影)

に作者は存在しているが、トマソンとして残そうとする者はいないだろう。結果として、トマソンは作者不詳であり、いわゆる作者のいないアノニマスの事例である。また、街の中にあり、パブリックアートとしての側面を持っている。それらが特徴であるといえる。

アノニマスは多くの事例をパブリックアートに見出すことができる。日本建築美術工芸協会の調査研究委員会では、2016年にパブリックアートとパブリックプレイスを調査研究の課題とした。筆者も参画し、その調査報告書「エコロジーとアート」では、最初に「アノニマスな美」を検証している。

「アーティストなしの作品」としては、無名性・非作家性、土着性、持続性を特徴として挙げ、次の四つに事例を分類した。

- ①自然エネルギーの変換……水琴窟、風車、風、走馬灯、噴水など
- ②自然現象を視覚化……日時計など
- ③自然環境との融合……北山杉、棚田、石垣、瓦屋根、雪吊りなど
- ④自然素材の加工……しめ縄、桶、草履など

この分類は、エコロジーとアート、同時にパブリックプレイスとアートとしてのテーマ設定でもある。アートを芸術と等しくはできないが、芸術や超芸術の対象にこれらのテーマ設定を行うことは、「妙味ある違和感」、そして「トマソン」を見出す機会を高めるのではと考えている。

パブリックアートは人工的に設置されるものであるが、上述のように自然とのかかわりではアノニマスなものも多い。結果として、環境とエコロジーについての意識を高めてくれる。

環境は私たちの暮らしを支える。すなわち、居場所をつくる。今日、居場所に求められているのはエコロジーであり、そのため社会変革が行われている。そうした視点から社会をみると、違和感を覚えるときがある。地域の乱開発などであり、建築物の乱立による過激な都市開発である。そうしたことへの批判においても、トマソンを発見する考現学が役立つ。

それは作者のいないアノニマスとして成長する都市への観察者であり批判者となるといえる。

4. トマソンから知る相違への理解——「ふつう」とは？

「トマソン」という名称は、アメリカ出身のプロ野球選手、読売ジャイアンツのゲーリー・トマソンに由来している。四番打者のトマソンは空振りの三振が多く、「扇風機」などとの異名を付けられた。ゲームでは役立たないが、球団は高額な契約金を払い、彼をリスペクトした。建築物での「超芸術」を、彼の振る舞いや存在のあり様になぞらえたのであった。

繰り返しになるが、「トマソン」は日常の暮らしの中で

発見した環境における芸術であり、無価値の中に発見された価値への転換の発見でもある。それは、考現学により見出すことができる気づきである。結果、新たな位相への高まりをつくる。

この局面を、景観からは離れるが、人間社会に当てはめてみよう。「自分」と「他者」としての存在である。建築物における新旧を人間の自他での見方に替えたものである。一般には、自分自身を「ふつう」としてみたがる。そして、他者を「ふつう」から外した立場に置く。しかし、そこで「ふつう」とは、との疑問が生まれる。

多様性の現代社会において大切なことは、他者を理解できるかという視点である。

次の言葉がある。「Believe in Respect」……「尊敬の気持ちでとらえる」である。これは自分の側に基準を置くのではなく、他者の長所や価値を見出すことができるという余裕ある、あるいはゆとりある見方である。さらにいえば、余白をつけた見方である。すなわち、無地から内面についてとらえ、リスペクトする目線である。それは外観からだけでは見出すことができない。その発見の重要なプロセスは「対話」である。それは言葉に頼る必要はない。ただ、自分を他者の立場に置き替えた観察と理解である。

その練習は異文化を体験することである。同一ではなく、異同を見出すことができる訓練である。その例として、日常の風景からトマソンを発見し、その中にある価値を見出そうとするのが今回の目的でもある。それは前述した「ふつうとは？」の疑問への答えを見つけることにもなる。

5. 科学技術を環境とした状況——超環境

トマソンの発見という活動の中から、環境を守るという視点、すなわち、環境とエコロジーへ向かう意識を養成するだろう。

トマソンは芸術の中に「超芸術」を見出した。それはふつうの芸術を超えて、作者もいない、通常では価値のないものに新たな価値を見出した。結果、暮らしの位相を高めた。

環境とは主体者の周りの条件や雰囲気という。私たちの暮らしを支える身の回りが環境の対象である。人間としての私たちの暮らしは日々変化する。その累積の結果として、その日々の暮らしは多様化した。したがって、環境も多様化した。

さて、トマソンからの学びとして、芸術に「超芸術」を発想したように、環境の中に「超環境」を見出すことができるだろうか？ この疑問が生じる。

「超芸術」を発想したのと同じく、ふつうの環境を超えて、作者不詳の環境でリスペクトすべき価値と影響を持っている対象を挙げると、「科学技術」がある。これ

は現代社会では大きな存在であり、日進月歩で発達しており、上述の多様化の主力でもある。筆者は本基礎講座の「エコエティカ」の解説において、「科学技術は空気のような存在で、新しい環境である」と述べた。このように、科学技術はまさにリスペクトの対象であり、「超環境」と呼んでもいい存在である。

科学技術の振興は社会を変え、自然に対しても大きな影響を与える。科学技術を「環境」として、その使い手である人間が「主体者」という構図は、通常的环境と主体者との関係と同じである。筆者はそれを「状況」と呼んでいる。まとめとして、科学技術を「環境」として暮らす私たち人間が「主体者」となる「状況」は、「超環境」と呼んでもよさそうである。

むすび

本稿ではトマソンに着目し、絶えず改修や建て替えなどにより変容する都市環境における新しい論題（イシュー）を提示した。「むすび」にあたり、補遺として以下の三つを記しておきたい。

- ①従来から、都市の中に歴史的遺産を見出す取組みに「東京路上博物誌」がある。街を対象とし、市中に存在する物件に価値を見出す活動である。その価値には、新種、希少性、絶滅種、化石種などを挙げ、切り口として、図像学的な評価を行っている。考現学の応用である。
- ②都市計画により一斉に都市や街が変容するのではなく、日常の環境がその時代の発動力として変容を導くことが一般的である。筆者の体験では、かつて住んでいた千葉市の街は、親子での世代交代により街の様子が点状に変化している。おそらく40年周期くらいで変容する。そうした中にトマソンがあり、いつもと違う状況を発見できる。
- ③異花受粉という言葉があるが、日々の変化の多様化は、この言葉のように新しい出会いによって新種が誕生し、遺伝している。こうした中に、私たちが暮らす「環境」がこちよい居場所として、さらには経済的にも持続可能になるためには、観察者と批判者としての市民の立場が大事となる。トマソンはそうした目線を育て、エコロジカルな新しい環境倫理をつくり上げていく一つの基（もと）になるのではと考え、本稿をまとめた。

余白について前述したが、環境と主体者の関係は目線の位置にもよる。いま、目の前にカップとソーサーがある。それはテーブルの上にある。テーブルは居間にある。居間は2階建ての1階にある。家は東京から離れた人口の少ない都市にある。それは日本という国の典型かもしれない。日本は世界の極東にある。あるいは地球の中心にあるともみえる。その日本は、原発のメルトダウン

から10年を経たが、なお地震や集中豪雨が起こる。また地球に広がるコロナパンデミックの中にある。しかも、いまはオリンピックの開催について裁量すべき「状況」にある……。

こうして、同じ個人でも目線を自由に時空間を変えてみるができる。狭くも広くも、過現未（過去・現在・未来）と変えて……。トマソンは主体者に、環境に新しい価値を見出すことを気付かせてくれる。

終わりに、以下のFacebookの「超芸術トマソングループ」(<https://www.facebook.com/groups/20204279406238>)からは、情報の収集と一部につき画像を引用させて頂いた。記して謝意を表す。

【参考文献】

- 1) 佐藤建吉、環境と状況の違い、そして「できる状況づくり」、月刊 環境管理、2021年1月号、vol.57、No.1、pp.66-69
- 2) 佐藤建吉、現代社会の環境倫理学「エコエティカ」、月刊 環境管理、2021年2月号、vol.57、No.2、pp.66-70
- 3) 佐藤建吉、自然と至然—自然と共生するアプローチ、月刊 環境管理、2021年3月号、vol.57、No.3、pp.70-74
- 4) 佐藤建吉、社会受容性という環境問題、月刊 環境管理、2021年4月号、vol.57、No.4、pp.59-64。
- 5) 赤瀬川原平(1987)、「超芸術トマソン」、ちくま文庫
- 6) 小川主水・佐藤建吉・小高文博(2010)、生活の中のコースティック像のコンピュータ・シミュレーション、日本機械学会
- 7) 日本建築美術工芸協会(2016)、「エコロジーとアート」
- 8) 藤森照信・荒俣宏・春井裕(1987)、「東京路上博物誌」、鹿島出版会

【註】

言葉の中に「トマソン」を見出すことができる。それは「異同」である。その意味として辞書には「異なっているところ。相異。違い」とある。なお、「同」は語調をととのえる添え字で意味がない、とある。これはもう一つのトマソンであると筆者は感じた。